

寄り道研究所 NIGHT FLIGHT SPECIAL

日本には 4158 兆円もある。それなのに、なぜ？

上級〜一般教養レベル

「資産大国」と「豊かな暮らし」の間にあるもの

日本には 4158 兆円もの資産がある。

この巨大な数字を見れば、

「それほどの資産があるなら、日本は十分に豊かな国なのではないか？」

という疑問が生まれます。

一方で、物価上昇や実質賃金、家計負担などを見れば、その巨大な数字と私たちの日常生活には距離があるようにも感じます。

なぜでしょう。

ここからは初級・中級編より少し高度を上げて、

ストック、フロー、GDP、GNI、企業利益、設備投資、賃金、消費
という経済の計器を使いながら考えてみます。

まず「4158 兆円」の読み方に注意する

最初に、とても大切なことがあります。

4158 兆円という数字だけを取り出して、「日本人が自由に使える現金が 4158 兆円ある」と考えてはいけません。

経済全体の資産を考える場合には、

土地や建物などの**非金融資産**、

預金・株式・債券などの**金融資産**、

そして反対側には**負債**があります。

さらに、

誰の資産なのか。

何を含めた数字なのか。

総資産なのか純資産なのか。

どの時点の評価額なのか。

によって意味が変わります。

したがって、本編で 4158 兆円を使う際には、最終的に元資料の定義を確認する必要があります。

ここが経済統計を読む第一歩です。

大きな数字を見たら、まず「何を数えた数字なのか」を確認する。

数字そのものより、定義を見る。

これは NIGHT FLIGHT の基本ルールにしてもよいでしょう。

📦 ストックとフローは別の計器

4158 兆円のような資産額は、基本的にストックを見る考え方です。

ストックとは、

ある時点で、どれだけ蓄積されているか。

一方のフローとは、

一定期間に、どれだけ経済活動が行われたか。

代表的なのが GDP です。

たとえば、住宅を持っている家計を考えてみます。

住宅という資産価値はストック。

毎月受け取る給料はフロー。

毎月の消費もフローです。

資産が 1 億円あったとしても、所得が少なく、現金収入も少なければ生活に余裕があるとは限りません。

逆に、資産額はそれほど大きくなくても、安定した所得があり、毎月十分なキャッシュが入ってくる家計もあります。

つまり、

資産の大きさと、所得の豊かさは別の問題

なのです。

ここで、最初に登場した言葉が生きてきます。

「資産をいくら持っていて、必要なときに現金がなければ金持ちとはいえない。」

これは経済学的に言い換えれば、

ストックだけでなく、キャッシュフローと流動性も見る必要がある

という話でもあります。

🌐 GDP だけで日本の「稼ぐ力」を測れるのか

次の計器は GDP です。

GDP（国内総生産）は、

一定期間に国内で生み出された付加価値

を見る代表的な数字です。

ここで重要なのが「国内」です。

日本企業が海外で事業をして利益を得るケースもあれば、海外企業が日本国内で生産活動を行うケースもあります。

そこで別の角度から見るために登場するのが、

GNI（国民総所得）

です。

非常に大ざっぱに言えば、

GDP＝日本国内で生み出されたものを見る

GNI＝日本の居住者が国内外から得た所得を見る

という違いがあります。

日本企業が長年海外へ投資してきた結果、現在の日本を見るには「国内生産」だけでなく、海外との所得のやり取りも重要になっています。

 **そこで「第一次所得収支」が出てくる**

日本企業が海外企業へ投資する。

海外に子会社を持つ。

海外の株式や債券などを保有する。

すると、

配当

利子

海外子会社などから得る収益

といった所得が国境を越えて動きます。

国際収支統計では、こうした所得の受け払いを見る重要な項目の一つが、

第一次所得収支

です。

ここを見ると、

日本は輸出だけで稼いでいる国ではない

という姿が見えてきます。

日本の稼ぎ方そのものが変化してきたわけです。

しかし――。

ここで次の疑問が出ます。

海外で稼いだお金が増えたら、なぜ私たちの給料がすぐ増えないのでしょうか？

ここからが今回の本題です。

 **「稼いだ」と「家計へ届いた」の間には長い配管がある**

企業が利益を得たからといって、その利益が翌日そのまま社員の給料になるわけではありません。

企業にはさまざまなお金の使い道があります。

人件費

設備投資

研究開発

借入金の返済

税金

配当

内部資金

企業買収

海外への再投資

などです。

したがって、

企業利益↑ = 家計所得↑

と一本線では結べません。

重要なのは、その間にある配分と循環です。

ここを私は、

「日本経済のお金の配管図」

として考えてみたいと思います。

 設備投資は、巨大な「お金のポンプ」

ここで半導体工場を考えてみます。

企業が巨大な工場へ投資すると、その支出は一社だけでは完結しません。

建設

製造装置

精密部品

半導体材料

化学品

特殊ガス

電力

水処理

物流

保守

情報システム

などへ発注が広がります。

これは経済学でいう波及効果を考える入口になります。

一社の設備投資が別の会社の売上となり、その会社からさらに別の企業や従業員へお金が流れる。

だから工場を、

巨大な「お金のポンプ」

として見ることができます。

ただし、ここにも落とし穴があります。

売上高ではなく「付加価値」が重要

たとえば部品会社の売上が 100 億円から 120 億円へ増えたとします。

一見、素晴らしい成長です。

しかし、

原材料費が急騰した。

電気料金も上昇した。

物流費も増えた。

人件費も上がった。

その結果、利益が減ってしまうこともあります。

つまり、

名目上の売上増加と、本当の収益力改善は同じではありません。

そこで企業を見るとときには、

売上高

↓

売上総利益（粗利）

↓

営業利益

↓

キャッシュフロー

と一段ずつ下りて見る必要があります。

特に今回の「日本復活」というテーマでは、

価格転嫁によって適正な粗利を確保できているか

が重要になります。

大企業だけではありません。

その工場から仕事を受けた中小企業まで粗利を残せるか。

ここを見なければ、本当の経済波及は分かりません。

私たちが探したい「好循環」

ここまでを一本につなげてみます。

企業の投資が増える

↓

建設・設備・材料などの受注が増える

↓

周辺企業の売上が増える

↓

適正な粗利・利益が残る

↓

賃金が上がる

↓

家計所得が増える

↓

消費が増える

↓

企業の売上が増える

↓

次の設備投資が行われる

この循環が何度も回れば、

ストックとして存在していた資産が、フローとして経済を動かす
ようになります。

これこそ、今回私たちが「日本復活」の観測対象にしたいものです。

 ただし「供給制約」という壁がある

企業がお金を持っていたても、

投資したい＝すぐ投資できる

とは限りません。

技術者がいない。

建設人材がいない。

電力容量が足りない。

工場用地がない。

部品供給能力が足りない。

物流能力が足りない。

これが**供給制約**です。

ここで例の「教室不足」が非常に分かりやすくなります。

子どもが突然増えても、学校は翌日から増やせません。

先生も校舎も机も必要です。

現在の国内投資も、

「お金が足りない」のではなく、

「お金を受け止める能力が足りない」

という局面が部分的に起きる可能性があります。

しかし、経済的にはその不足そのものが次の投資需要にもなります。

電力不足なら電力設備。

人手不足なら自動化・ロボット。

物流不足なら物流施設。

つまり、

ボトルネックを探すことは、次の投資先を探すことでもある
わけです。



「良いインフレ」を数字でどう見る？

物価が2%上昇した。

それだけで、

「良いインフレになった」

とは判断できません。

見る必要があるのは、

物価

賃金

企業利益

設備投資

生産性

個人消費

などの組み合わせです。

たとえば物価だけ5%上がり、賃金が1%しか上がらなければ、家計の実質的な購買力は圧迫されます。

反対に、

企業が適正価格を取れる。

粗利が確保できる。

賃金が上がる。

設備投資も増える。

生産性も上がる。

家計消費も維持・拡大する。

この方向へ進めば、

「価格上昇」から「所得と投資を伴う循環」へ

近づいていると考えることができます。



では、株式市場は何を教えてくれるのか

ここで今回集めた市場データの意味が出てきます。

日経平均だけを見るものではありません。

TOPIX

売買代金

出来高
業種別騰落
半導体
重工
銀行
商社
鉄鋼
電線
建設
不動産

などを並べる。

すると、

資金がどの産業を評価し始めているか

が見えてきます。

ただし重要なのは、

株価上昇＝日本復活の証明ではない

ということです。

株式市場は将来への期待を先に織り込むことがあります。

期待が外れることもあります。

だから株価は、

日本復活そのものではなく、

日本復活の可能性を先に探しに行く「偵察機」

として使う。

そして偵察機が見つけた場所を、

受注

売上

粗利

利益

設備投資

賃金

という実体経済の数字で後から検証する。

これなら株価だけの物語にはなりません。



「日本復活ダッシュボード」を作るなら

ここまで来れば、4158 兆円一つではなく、いくつかの計器を並べられます。

① ストック

日本全体の資産・負債・純資産

② 世界からの所得

GNI、第一次所得収支など

③ 企業活動

企業利益、営業キャッシュフロー、設備投資

④ 波及

中小企業の売上・利益・価格転嫁

⑤ 家計

名目賃金・実質賃金・可処分所得

⑥ 消費

個人消費

⑦ 次の投資

設備投資計画、受注、研究開発

⑧ 市場の先行観測

株価、出来高、売買代金、業種間の資金移動

一つの数字が上がったから「復活」。

ではなく、

複数の計器が同じ方向を指し始めたか
を見るわけです。

 4158 兆円は「答え」ではなく「最初の？」

さて、出発地点へ戻りましょう。

「日本には 4158 兆円もある。それなのに、なぜ？」

上級～一般教養レベルまで来ると、この質問への答えは少し変わります。

4158 兆円というストックが大きいこと自体には意味があります。

しかし、それだけでは、

所得が増えているか。

企業が投資しているか。

中小企業まで利益が届いているか。

賃金が増えているか。

消費が増えているか。

は分かりません。

つまり、

****資産額は「体格」を示す。**

フローは「血流」を示す。 **

大きな体を持っていても、血液が十分に循環しなければ健康とは言えません。

経済も似ています。

だから私たちは、4158 兆円という巨大な数字を否定するのではありません。

そこから、もう一つ質問するのです。

「その資産は、次の価値を生み出すために動いているだろうか？」

✳️ 日本復活を測る数字は、4158 兆円の資産額だけではない

見るべきなのは、

資産

だけではありません。

世界で稼ぐ所得

↓

国内への投資

↓

周辺企業への発注

↓

粗利・利益

↓

賃金

↓

消費

↓

次の設備投資

という循環です。

この血流が太くなっているか。

途中で詰まっていないか。

そして、どこが次のボトルネックになるのか。

そこまで数字で追って初めて、

「日本復活」という言葉を検証できる

のではないのでしょうか。

📖 寄り道研究所

NIGHT FLIGHT SPECIAL

● 上級〜一般教養レベル解説でした。

4158 兆円という一つの巨大な数字から始まった「？」。

調べてみると、答えは数字一つの中にはありませんでした。

だから次の NIGHT FLIGHT では、

「では、実際の数字はどうなっている？」

へ進みます。

世界編では、**GDP・GNI・第一次所得収支・海外投資**。

国内編では、**設備投資・企業利益・賃金・消費・株式市場の資金移動**。

ここから先は「日本復活」という言葉を信じるのでも、否定するのでもありません。

数字を並べて、自分たちで確かめてみましょう。  